



語順 B は、V2 と s とがいわば反転した順序で実現されるという、意味（相対的作用域）と形式（形態素順）の間に“ねじれ”を含んでいる。

(1) のような変異に関わる V2 は、「合う」「忘れる」「返す」「直す」「尽くす」など、意味的に control verb と分類される一群である。また、s(ヴォイス辞)として関わるのは、使役の「させ」と受身の「られ」である。

なお、使役あるいは受身からの複合動詞という意味は、相対的作用域を描いて <<(V1)s(V2)>> のように表される。この意味は、我々の目当ての意味とは異なる。しかし、図(2)の破線で示されるように、形式上は語順 B と同音の / V1 - s - V2 / で表される。例えば、「新郎新婦がケーキを食べさせ合う」「彼女に惹かれ直した」。これらの表現は、資料から除外する。

本稿では、現在の状況の観察に基づき、先行研究による言語変化の一般則に関する知見でそれを補いながら、両語順が関係する通時的变化（“動き”）について推定する。それとともに、今後の研究課題として、(1) に示される変異やその通時的变化が調査対象として取り上げるに足る実体をなしていること、また、理論的興味をそそるものであることを示したい。

以下、次のように論を進める。まず、共時的観点から、語順 A と B の競合について論ずる。両語順の勢力関係の現況を、第 2 節では表現構成要素 V1, V2 の文法的特徴と、第 3 節では文体差と、関連付けて記述する。第 4 節では両語順を生じさせる規則を説明する。続いて、通時的観点から、両語順の勢力関係の変化を論ずる。第 5 節では、各世代の話者へのアンケート調査の結果に基づき、過去についての推定を提示する。第 6 節では未来について予想を述べる。最後に、第 7 節に短くまとめる。付録として、第 8 節でインターネット使用例調査の手順を解説する。

## 2. 語順 A, B の勢力関係

語順 A と B の勢力関係は、V1 (2.1) や V2 (2.2) の種類によって左右される。

### 2.1 V1

語順 A と B の勢力関係は、V1 の活用類の違いによって左右される（山部 2011a）。大まかには、次のようだ。V1 = 五段動詞・一段動詞のときは、語順 A が著しく優勢である。V1 = サ変動詞のときは、語順 B が強まる方向へ傾く。このことの自発的テキストにおける現れとして、(3) のように、同一文中で五段・一段動詞とサ変動詞が、それぞれ、**語順 A** と **語順 B** で交替している事例が観察できる。一方、これと反対の組み合わせでの交替の事例は、これまで見出していない。

- (3) a. さて、ここで当初の疑問がまた頭をよぎりました。「【二つの磁石の】同極同士を向かい合わせる（**反発させ合う**）のか、違う極同士を向かい合わせる（**引き合わせる**）のか？」

【日記、装置自作】

- b. な・ぜ・か ボクだけ解答が**配り忘れられたり**、(← 2 限目) ボクの列だけ解答を **回収され忘れたり** ... (← 3 限目) もーーー なんやねん  
!! !! !! ww(≡ √ ≡ ; #)←

【日記、大学センター試験を受験した、2010/01/16】

- c. 殴ったら殴り返される。批評人間は **批評され返す** し叩く人間は叩かれる。  
それだけのことじゃねえかw

【掲示板、2009/08】

- d. そうした死を契機に、戦争の意味が**問い直されたり**、現代日本の精神風土が**点検され直し**たりするというようなことはあるであろう。

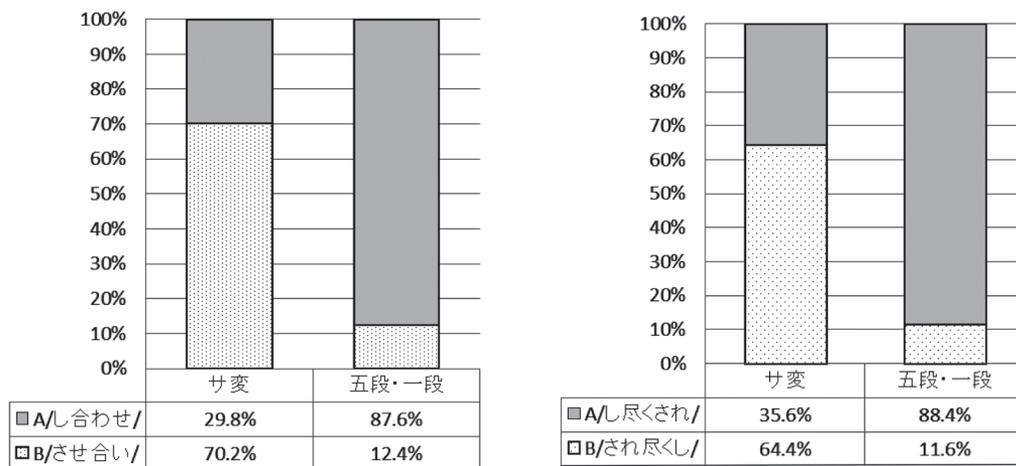
【論文、心理療法、亜細亜大学、2010】

- e. プリプリのエビシューマイ」は人気商品なので生産量が多く、生産ラインは**考え尽くされ、改善され尽くし**ている感もありますが、それでも100%完璧ではないのです。

【会社の採用案内、社員インタビュー、味の素冷凍食品株式会社】

語順 A と B の勢力関係を、インターネット上の使用件数比で見よう。調査手順は第 8 節（付録）に示す。調査結果をグラフ（4）に示す。（4a）は、例文（1a, 3a）のような V2 が「合う」で s が使役の場合、（4b）は、例文（1e）（3e）のような V2 が「尽くす」で s が受身の場合についてである。（グラフ（4a, b）の場合は、第 5 節のアンケート調査の質問項目でもある。）

- (4) a. V2 = 合う、s = させる (例文 1a, 3a)      b. V2 = 尽くす、s = られる (例文 1e, 3e)



用例数：(4a) : サ変動詞 1,212、五段・一段動詞 555 (実際の書き込み数=非該当・重複を除外)

(4b) : サ変動詞 26,973、五段・一段動詞 22,612 (非該当・重複を含んだままの数)

(4)の(a)の場合と(b)の場合は、類似した傾向を示している。いずれの場合でも、サ変動詞では語順 B のほうがいくぶん優勢で、五段・一段動詞では語順 A がかなり優勢である。

## 2.2 V2

語順 B は、V2 がある種類のものに限られる。

本論では、動詞連鎖 (V1 - V2) を構成する V2 を、先行研究 (影山太郎 1993 など)

の知見を折衷して、(5) のような四類に分類する。以下では、この四類をⅠ類～Ⅳ類と呼ぶ。

(5) 類	V2 の例	慣用の用語
Ⅰ.	(乗り) 換える、(作り) 込む、(投げ) 上げる	語彙的複合語
Ⅱ.	合う、忘れる、返す、直す (=例文(1) の V2)	統語的複合語、control verb
Ⅲ.	過ぎる、慣れる、かける、終わる	統語的複合語、raising verb
Ⅳ.	やがる、ます、ておく、てみる	補助動詞

語順 B は、Ⅱ類の V2 では可能だが、Ⅰ類の V2 では不可能である。このことについて V1 が五段・一段動詞の場合の様子を述べると、次のようだ。Ⅱ類の V2 では、(2.1 で述べたとおり) B 語順は語順 A に対して著しく劣勢だが全く不可能というほどではない。一方、Ⅰ類の V2 では、きっぱりと A 語順だけが可能である。この対比のテキストでの現れとして、(6) のように、Ⅰ類 (「換える」「込む」) とⅡ類 (「直す」「尽くす」) が、それぞれ、**語順 A** と **語順 B** で交替している事例が見られる。一方、これと反対の組み合わせでの交替の事例は、見い出していない。

- (6) a. 「物語」は常に **語られ直し** **書き換えられます**。  
 【田中ユタカ、小説『ミミア姫』「創作メモ」、電子書籍。著者とのインタビュー記事に引用】 <http://www.excite.co.jp/News/reviewbook>
- b. 練りに練られた脚本。完璧な衣装と美術。印象的な映像。見事な配役と演出。そして、それらをさらに紡ぎあわせ**練りこまれた編集**。【9 文略】構図や照明、美術や衣装、そして全体の構成と全編に亘って **練られ尽くした** 映画だと感じ続けながら観ただけに、書き残しておきたいことだらけ。  
 【日記、映画評。2005/11/20】

なお、語順 A と B が原理的に存在しない場合として、次の二つがある。

Ⅰ類の V2 は、V1 としてサ変動詞を取ることはない (影山 1993 など)。例えば、「\*記載し換える」「\*彫琢し込む」はない。したがって、「サ変の V1 - Ⅰ類の V」に基づく使役や受身というものは、語順が A であれ B であれ、ない。

また、Ⅲ類やⅣ類の V2 は、語順 A とも B とも無縁である。語順 A と B は、意味的に動詞連鎖 V1 - V2 がヴォイス辞の作用域内にあるもの、と定義される (図 (2) やその上段落など)。しかし、実際には、Ⅲ類やⅣ類の V2 からなる動詞連鎖は、ヴォイス辞の作用域に入ることがない。例えば、Ⅲ類の「過ぎる」について、「\*切り過ぎさせる」「\*切り過ぎられる」はない。

### 3. 語順 A, B の勢力関係と文体

第 3 節では、語順 A, B の勢力関係と文体の高低との相関について論ずる。

### 3.1 規範意識

語順 B は、規範意識に障る表現のようだ。

語順 B は、これまでにインターネット上で話題になったことがある。V2=「尽くす」の場合だ。(7)(i)の掲示板でのように、「され尽くす」(語順 B)に対して、断固たる否定的見解を示す人がいた。(7)(i)の他に、(ii)と(ii)の掲示板でもそうだった。

(7)(i)【質問:】「し尽くされる」【語順 A】と「され尽くす」【語順 B】という言い方に何か違いはありますか?完全に同じでしょうか?

【ベストアンサーに選ばれた回答:】「し尽くされる」は正しく、「され尽くす」は誤りです。「尽くす」は「尽きる」(正確には文語「尽く」上二段)から派生した使役的な意味をもった他動詞です。「起きる」→「起こす」などと同じです。「立ち上げる」「並び替える」が間違いであるように、「され尽くす」も間違いです。

【掲示板、相談、2010/07/30.【括弧内】と下線は山部】

(ii)【インフォシーク、2005/04/29:「動詞の連用形+尽くす」の受身形の正しい形】

(iii)【2ちゃんねる、2009/03/23:~され尽くす と ~し尽くされる について】

### 3.2 文筆家による使用例

インターネット上のテキスト(掲示板や日記)では、語順 B がくだけた文体に現れている様子が見え取れる。このことは特に例文(3)の(a, b, c)に当てはまる。その一方で、同語順は、文章の格調と相容れないというわけでもない。例文(8)のように、文豪による使用例がある。[引用元の資料について。(8a~d)の事例は、実際の紙面で確認した。(8e)は、国立国語研究所(編)(2005)『太陽コーパス』から。aとbは原文中のふりがなを略。]

(8) a. 人間と石との累積のようになんか思えない都会は、私を圧倒してしまい、私には何もわかりませんでした。労働のリズムは熱病じみて——人の心を奪い取ってしまう、とうてい **和解させ合う** ような種類のものではありませんでした。

【高安国世(1953)リルケ、『若き詩人への手紙・若き女性への手紙』「訳者後記」、新潮文庫、2007年改版、p.125. 女性からリルケへの手紙の日本語訳】

b. 大胆な女の子の間では夜に学校に忍び込んで、意中の男の子のロッカーに手紙を投げ込んでくる遊びが流行っていたことがある。クラブ棟の使用がずさんで一階の窓が **施錠され忘れ** ていることが多かったからできた遊びだが、【略】

【小野不由美(1991)『魔性の子』新潮文庫、p.284.】

c. けれども私とその新しいものに出会うたびごとに、始まりには江島先生との出会いがあることが、いつも新たな形で **確認され直す** のである。

【下田正弘(2000)「【随想】わすれられないおくりもの —江島恵教先生—」『インド哲学仏教学研究』7, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部インド哲学仏教学研究室、p.9.】

- d. これは、ヘーゲルが指摘していることであるが、所有するものは、その意志を物件のなかに反映するちょうどそれとおなじだけ、所有物そのものの構造によって規定される、そのかぎりでは所有物に**所有され返す**ということである。

【鷲田清一(2002)『時代のきしみ』阪急コミュニケーションズ, p.29】

- e. 世界の陸面は大概**研究されつくした**が、海底の祕密は、尚ほそのままに人間の世界から固く扉されてゐる。

【雑誌『太陽』1925年9号、〈雑学〉】

語順 B についての上述の三点の事実観察 — (i) 規範意識 (3.1)、(ii) 例文 (3a, b, c) のようなくだけた文体での使用、(iii) 例文 (8) のような文筆家による使用 — を考え合わせると、語順 A と B の文体的分布については、次のように推測できる。

- 規範意識を反映しやすい種の文体においては、語順 A, B の勢力関係が語順 A 優勢の方向へ傾く。そのような文体とは“中流”の層である。
- 残余の両端の文体層 — “上流”(名作)と“下流”(インターネット上の駄文) — では、規範的意識の影響が比較的小さい。語順 B の勢力が最も盛んであるのは、ここにおいてである。

#### 4. 語順 A と B を支えている規則

語順 A、語順 B、および両者間の変異は、どんな文法的仕掛けで生じているか。第4節では、関係する規則を説明する。これにより、通時的に変化する性質は何かについての議論(第5、6節)と、他言語の事例との対照(6.2)を可能にする。

##### 4.1 二つの語順規則

形態素配列を決定する規則として、(9)の二つを仮定する。矢印(→)の左辺の条件に当てはまる表現は、→の右辺の配列で実現される。これら二規則は、例文(1)の事例においては、いずれも適用可能である。個々の使用事例においてどちらかが適用されることから、変異(ゆれ)が生じる。両規則それぞれの一般言語学的タイプにちなみ、規則IをMirror、規則IIをTemplateという用語で呼ぶことにする。

##### (9) 二つの語順規則

###### I. Mirror

意味(相対的作用域)                      形式(語順)

⟨⟨V⟩x⟩                                      → / V x /

V = 動詞

x = V を取る要素(接辞など)

###### II. Template

語彙的要素                                      形式(語順)

{V}, {x}, {y}                                → / V y x /

V = 動詞「する」

x = 複合動詞  
y = ヴォイス辞 (させる、られる)

用語の命名由来は、次のようだ。Mirror Principle (鏡像の原則) : 同規則が passive, applicative など統語操作の適用順を形態素の配列順に反映させるものとして規定されたことから (Baker 1985 など)。Template (型枠) : 各形態素が実現する位置が指定されていることを、あたたかも型枠に嵌められるようだと見立てることから。

語順規則としての Template の考え方は、身近な言語の例をあげると、英語での助動詞と not の前後関係に関して当てはまる。意味(助動詞の法性と not の否定の作用域大小関係)に関係なく、語順は / 助動詞 - not / である。例、〈〈NOT〉 MUST〉 → / must not / (同様に may も) ; 〈〈NEED〉 NOT〉 → / need not / (同様に can も)。

#### 4.2 二つの語順規則の特徴と、存在の動機付け

規則 I (Mirror) は、述語がどんな〈意味〉を表しているかを問題にする。規則 I が二回繰り返して適用されると、語順 A が得られる。例えば、

〈〈競争する〉 合う〉 → / 競争し合う /  
〈〈競争し合う〉 させる〉 → / 競争し合わせる /

規則 I は、日本語の動詞連続全般にわたって成り立つ (Narrog 2010 など)。同規則の存在の動機付けは、演繹的だ。同規則は、日本語の文法全般で成り立つ規則性 — 右側主要部の規則 (“意味的に取られる要素—取る要素”の順序) — 一つの場合である。

規則 II (Template) は、述語が何という {語彙的要素} から構成されるかを問題にする。これが適用されると語順 B ができる。例えば、

{競争する}, {合う}, {させる} → / 競争させ合う /

図(2) 上段に該当する二つの意味(例、〈〈競争する〉 合う〉 させる)と〈〈競争する〉 させる〉 合う) のどちらから出発しても、規則 II が適用されれば同じ形 (/ 競争させ合う /) に至る。

規則 II の存在の動機付けは、類推的だと考えられる。同規則は、日本語において多数派をなしている具体的事例の様子をまとめたものだ。サ変の V1 が構成に参加する場合の語順は、/ する — s — V2/ が圧倒的な多数で、/ し — V2 — s/ は少数だ。/ し — V2 — s/ が可能な V2 は、表 (4) の II 類に限られる。(10) に示すように、サ変の V1 が共起できる V2 (II ~ IV 類) のうち III 類と IV 類のものでは、ヴォイス辞は V1 の直後には現れる (β 列) が、V2 の直後には現れない (γ 列)。

(10)

	a, / し—V2/	β, / され—V2/	γ, / *し—V2—られ /
III 類	カットし過ぎる	カットさせ過ぎる	*カットし過ぎさせる
	注文し慣れた (酒)	批判され慣れた (男)	*注文し慣れられた (酒)

Ⅳ類 退職しやがる	退職させやがる	*退職しやがらせる
整理しといた	紹介されとこう！	?整理しとかれた(棚)

現在に存在している語順規則Ⅱが過去にどんな経緯で出現したかは、5.3で考察する。

規則Ⅱは、存在が類推に動機付けられていることに呼応し、適用範囲を類推的やりかたで拡張する。そのため、安定的な適用の範囲以外でも、それと似た場合には散発的に適用される。同規則は、V1がサ変動詞の場合に最も強力だ。しかし、五段・一段動詞の場合にも無効はない。五段・一段動詞の語順Bは、V2が「合う」「尽くす」の場合に限れば、インターネット上では語順Aの約十分の一の頻度で生起する(グラフ(4))し、アンケート調査(5.3)でも容認する人がいた(5.2.1)。

#### 4.3 二つの語順規則が存在できる余地

二つの競合する実現方法の存在を許している要因として、機能的要因が一つ考えられる。

ヴォイス辞とⅢ類のV2の意味的組み合わせのうちいくつかは、文法的には排除されないものの、実際には使用例を探し出せないか、非常にまれである。例えば、V2が「忘れる」の場合、受身は複合動詞全体を作用域に取るのは容易(例文(3b))だが、V1だけを取るのは難しい(11a)。反対に、使役はV1だけに係るのは容易(「子供をトイレに行かせ忘れた」)だが、複合動詞全体に係るのは難しい(11b)。(11)の例文について、私は、文法的な瑕疵を見出せないものの実際に使う気がしない。→の右辺のように言うところだ。

- (11) a. 借金を踏み倒して、金を返され忘れるほうが悪いと言うとは何事だ。  
 <<(V1) され> 忘れ> → 返してもらい忘れる
- b. トイレに行き忘れさせるほど面白い小説  
 <<(V1) 忘れ> させ> → 行くのを忘れさせる

意味的な組み合わせのいくつかは、実際には使用頻度がきわめて低い。これを意思伝達の機能という観点から見ると、日常生活では表現意図を正しく取るために形態素順に頼る必要がない場面がしばしばある、ということになる。このことが、語順規則Ⅱが存在し、そのために生ずる変異や同音異義が存続できる余地をなしていると考えられる。

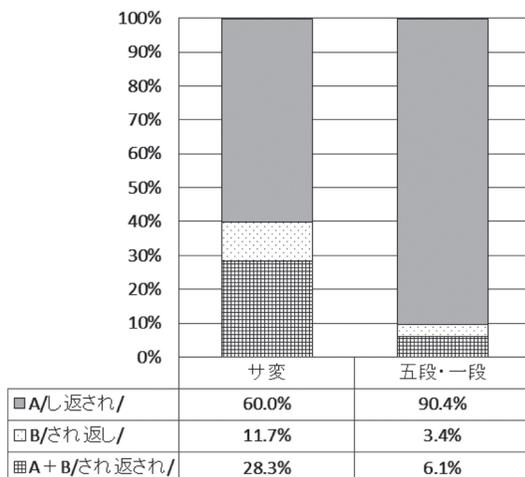
#### 4.4 二つの語順規則がともに適用される場合

規則ⅠとⅡは、両方が同時に適用されることもある。そのとき、形式/V1—られ—V2—られ/が得られる(これを“語順A+B”と呼ぶことにする)。(12)の例は、V2=「返す」の場合である。

- (12) a. 好きな絵師さんがいたのでフォローしてみたらフォローし返された。(語順A)
- b. フォローされても、フォローし返す必要は必ずしもない。フォローしても、フォローされかえすとは必ずしも期待しない。(語順B)
- c. あっ(ω) そういえばこないだアカ警察のえらい人をこっそりフォローしたら、気づかれて、フォローされかえされました(ω) キャー(語順A+B)

語順 A + B が最も現れやすいのは、(12) のような、V2 が「返す」の場合である。この場合の三語順 (A, B, A + B) の勢力関係は、インターネット上の用例の件数比では、グラフ (13) のようである。この資料の調査手順は第 8 節に示す。

(13) V2 = 返す、s = られる、インターネット上の件数



用例数：変動詞 4,267 (実際の書き込み件数)

五段・一段動詞 23,827 (非該当・重複を含んだままの数)

意味 <<V1> 返す> られ> の各実現形の勢力関係は、次のようである。V1 が変動詞のときは、語順 A が約 6 割で最も多く、その次が語順 A + B の約 3 割である。語順 B は、約 1 割で、グラフ (4) の場合 (6 ~ 7 割) と比べて伸び悩んでいる。V1 が五段・一段動詞のときは、語順 A が他の二語順を圧倒している；五段・一段動詞の報告件数にわずかに混じっていた非該当例のほとんどが語順 B であり、語順 B の実態は上記 (3.4%) の約半分 (1%台) である。

語順 A + B については、英語における句動詞の動作主名詞のある種類の形式と、並行性を指摘できる。例えば、意味 <<pick up> er> = <つまみ上げる人> を表す形式としては、三形式 (a) (b) (c) がある (Ackema and Neeleman 2005, Chapman 2008 など)。

意味 <<pick up> er> → 形式 a. picker up b. pick upper c. picker upper

英語には動作主名詞の形式を実現する方法として、二つの競合する規則 (i) (ii) がある：(i) (a) picker up のように、主要部である動詞に -er を付加する；(ii) (b) picker up のように、全体の末尾に -er を付加する。(c) picker upper のような形式は、語順 A + B と似て、二つの実現方法の両方を適用したものだ。

## 5. 近年の通時的推移

第 5 節以降では、語順 A, B の勢力関係を、通時的観点から論じる。第 5 節では、両語

順の勢力関係が近年どのように推移してきたか、(約半世紀間の幅の)見かけの時間軸上で描く。5.1で調査方法、5.2で調査結果、5.3で考察を提示する。

## 5.1 調査方法

勤務校(岡山市)の内外でアンケート調査を行った。実施時期は、2011年7～8月と12月。回答者数は、質問文により616または703(=内訳は、学外567+学生49または136)。

本稿に関連する質問文は、(14)と(15)の8文である。各質問文について、回答者自身が“言う”○、“言わない”×、“まれ”△のうちどれに当てはまるか、各自で記入してもらった。[アンケート用紙では、各質問文は個別に全体を提示してあったが、ここでは二文を一行に折り畳んで掲載。また、挿絵を省略。記号△▲□■は、グラフ(17)の記号に対応；記号の四角と三角の区別は、グラフ(19)の記号に対応。]

- (14) この<sup>クラス</sup>学級では、生徒たちが仲良く助け合っています。  
担任の先生が、しっかり指導して、そのようにさせているのです。  
あの先生は、「生徒同士で助け{(a) 合わせる | (b) させ合う}」という方針なのです。△  
あの先生は、「生徒同士で<sup>きょうりよく</sup>協力{(c) し合わせる | (d) させ合う}」という方針なのです。▲
- (15) 女の子：「みんなは、苺のどこの部分を『頭』とか考えるのかしら？」  
— そのことは、もう<sup>すで</sup>既に調べられて明らかになってますよ。—  
それは、もう調べ{(a) 尽くされ | (b) られ尽くしと<sup>てるよ</sup>るが<sup>あ</sup>。□  
それは、もう<sup>けんきゅう</sup>研究{(c) し尽くされ | (d) され尽くしと<sup>てるよ</sup>るが<sup>あ</sup>)。■  
— 本当は、まだ調べた人はいません。—

## 5.2 結果

語順AとBの相対的な勢力関係(5.2.1)と、両語順の表す意味の受容度(5.2.2)について、年代的推移を調べる。本稿は、変化の有無と、(もし変化があるなら)その方向に注目する。

回答者の最年長は、大正14年(1名)、昭和2年(1名)、3年(3名)生まれだった。年代を、最年長の世代を除き、12年ずつで区切る。「各場合×各年代」について、両論点に関する状況を示す(と考える)指数を求める。下述の“大学生”は、ほとんど全員が平成4年(1992年)度生まれ(調査時、大学1年生)だった。

### 5.2.1 語順AとBの勢力関係

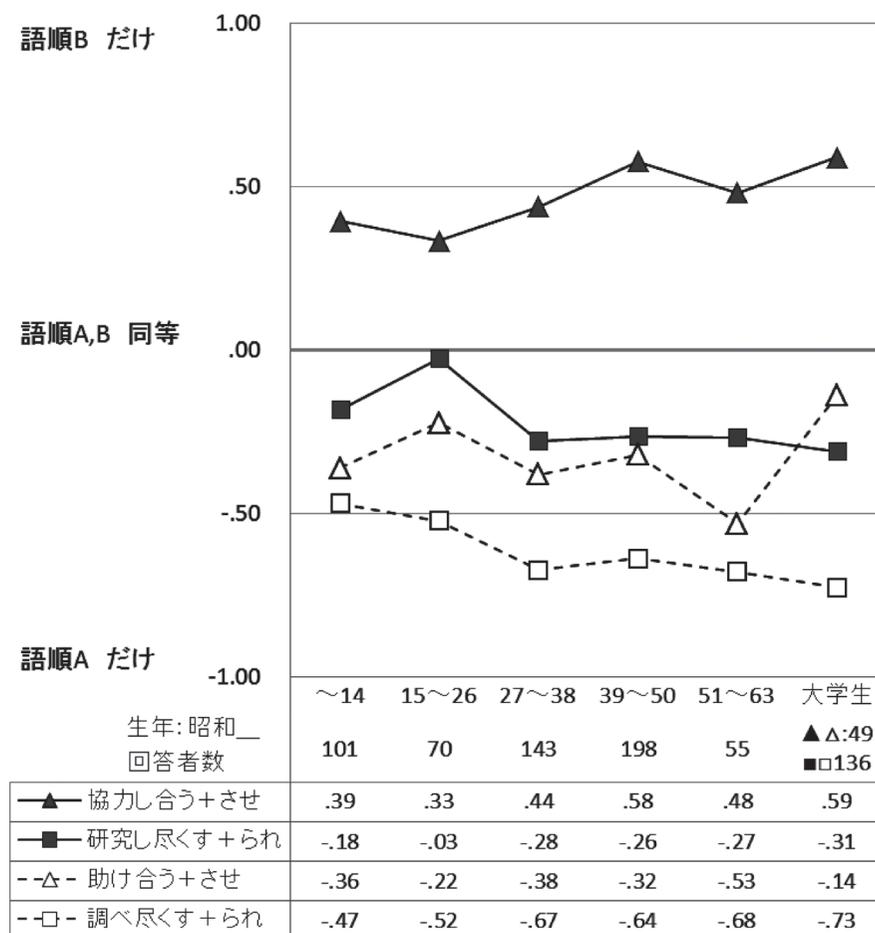
語順AとBの勢力配分を表す指標として、(16)の算式によって、¥の値を求めた。

$$(16) \text{ 指数 } \text{¥} = (B - A) \div (B + A)$$

上式でのA = 語順Aの、使用事例の件数、言うとの回答数。Bについても同様。

△の値は、-1 から +1 の間で変化し、負なら語順 A が優勢、正なら語順 B が優勢である。  
指数△の得られた値を、(17) の下欄に数字で、上欄に折れ線で示す。

(17) 指数△の世代推移



この調査結果からは、A、B の勢力関係の通時的経過について、語順 A の伸長あるいは語順 B の伸長のうち、どちら向きの動きも指摘できない。この観察から、次のように推測する。

- 語順 A、B 競合の状況は、最近の半世紀間は、均衡を保ち続けている。

インターネットでの使用とアンケートでの判断の乖離を、一点指摘しておく。例文 (15) のような V1 サ変、V2「尽くす」、s 受身の場合、グラフ (4b) に見られるように、インターネット上では B 語順が約 6 割を占め優勢である。これに対し、グラフ (17) の■の値が負であることから、内省判断では A 語順のほうが優勢である。その理由としては、内省判断は、3.1 で紹介したような規範意識から影響を受けているからかもしれない。ただし、もしそうだとした場合だけに影響があるのかは分からずに残る。

### 5.2.2 複合動詞の受身形の受容度

この調査における目当ての意味は、〈(5)のⅡ類の複合動詞からの使役〉や〈同受身 = long passive〉である。これらの意味を表す表現がどの程度に言語慣習として定着しているかを（間接的にはあるが）指し示すものとして、(18)の指数&を求めた。

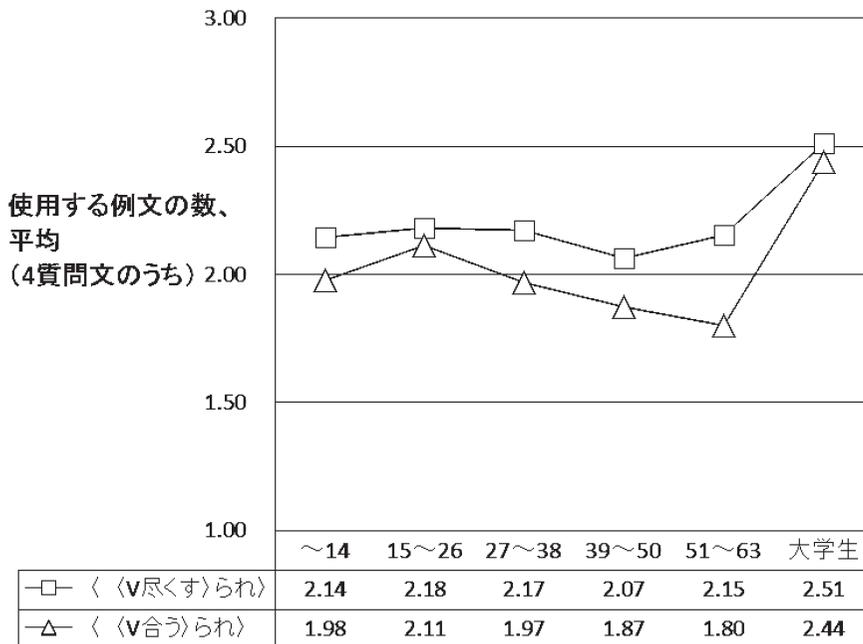
(18) 指数&：4つ組質問文のうち許容される文の数

&の値は、0から4の間で変化しうる。もし値が0であれば、V1の活用類（五段・一段・サ変）に関わらず、目当ての意味〈複合動詞の使役あるいは受身〉は表出が不可能であるという状況である。また、A、B両語順の配分割合が年代を通じて一定であることが成り立っている場合（5.2.1で見たように実際にそうである）には、&の値が（2.5ないし3.0以下の範囲に限れば）大きいほど目当ての意味がより深く定着していると思わせる。

(12)の指数¥が形式的側面の制約（どのように表出されるか）に注目するのに対し、(18)の指数&は意味的側面の制約（意味が表出されるかどうか）に注目したものだ。

指数&の得られた値を、(19)の下欄に数字で、上欄に折れ線で示す。

(19) 指数&の世代推移



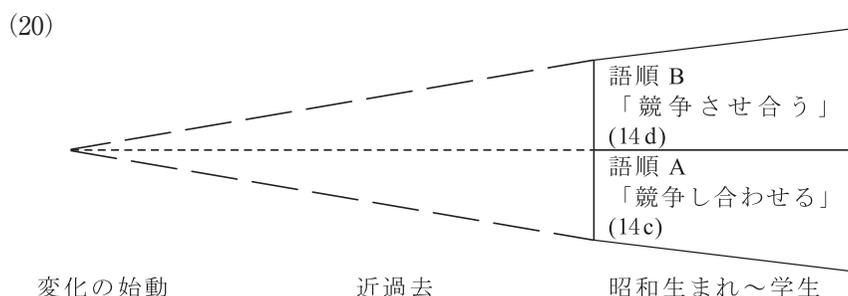
指数は、現役世代（昭和27～63年生まれ）で緩く落ち、大学生（平成4年度生まれ）で急激に大きく復調している。もしこの世代差が文法における違いを反映しているものだとすれば、変化の趨勢は次のようだと推測される。

- 複合動詞の使役や受身は、調査対象の期間（昭和から平成）にわたって全体的には、より言いやすくなってきている。
- 複合動詞の使役や受身は、現役世代では他世代に比較的していくぶん受容度が低い。これはこの世代が表現の適切さについて比較的敏感であり、そのため慎重な選択をしたためである。

### 5.3 過去についての推定

5.3では、5.2の調査結果を手掛かりにして、過去の経過を再構する。

5.2の調査結果を模式的に示すと、図(20)の実線部分のようになる。具体例として例文(14c, d)の場合を取り上げる。横軸は時間推移を示す。(ただし、本稿で言う時間推移は現在見られる世代差から推定されたもの。)縦軸は、意味〈〈競争する〉合う〉させるの表現の受容度、および、この意味を表す二種形式(語順Aと語順B)間の勢力配分を示す。



図(20)では、実線部分の変化の趨勢を、過去の方へ点線で延ばしてある。すなわち、調査対象の期間について見られる推移は、さらに過去から継続してきているものだ、と想定している。この考えを押し進めると、次の(ア)～(ウ)の推定に至る。

- (ア) 〈(5)のⅡ類の複合動詞からの使役〉や〈同受身 = long passive〉は、単純動詞やⅠ類の複合動詞からの使役や受身より遅れて、近過去に成立した。つまり、新用法である。この出来事が一連の変化の始動に当たる。
- (イ) その後、現在の学生の世代にいたるまで、新用法は定着度を次第に増してきた。
- (ウ) (イ)の期間を通して、表現形式である語順AとBは、勢力均衡を維持してきた。

変化経過についての上記の想定のうち(ア)と(イ)の部分は、文法的な知見(i)と通言語的な傾向(ii)に沿ったものになっている。

- (i) 受身表現の統語構造に関して。意味〈〈V1〉V2〉受身〉の表出(= long passive)が可能であることは、統語的に動詞連鎖V1 - V2が緊密な構造をなしていることの現れの一つである。(この構造は、研究文献では、動詞連続の統語構造が“restructuring”、別名“clause union”を受けたもの、と形容される。この状況の理論的定式化は、Aissen and Perlmutter 1976, 1983, Bobaljik and

Wurmbrand 2005, 影山 1993, Rizzi 1984 など)。

- (ii) 通時的变化の方向に関して、動詞連鎖 V1 - V2 の統語構造は、たいてい、より緊密になる方向へ向かう。

動詞連続の、統語的側面におけるこの種の変化は、意味的側面における次のような変化と呼応している。互いに別個の(しかし互いに関係する)二個の事態を描く用法から、ひとまとまりの一個の事態を描く用法へ。例えば[本動詞 + 補助動詞] (例、「V + ておく」「be going to + V」や複合動詞へ。この意味変化については、Hopper and Traugott 2003 : 205-207。)

いま、〈(5) のⅡ類の複合動詞からの使役〉と〈同受身〉の表現は新用法だ、と想定した(上記のア)。そうすると、新用法出現という出来事からの自然な成り行きとして、語順 B の成立した契機(オ)と、同語順が V1 = サ変動詞の場合に偏っている理由(カ)を、推論することができる。

- (エ) 元来は、サ変動詞を V1 とする複合動詞 (= 表 (5) のⅡ~Ⅳ類) は、ヴォイス辞の作用域に入れなかった。つまり、意味 \*〈〈する〉V2〉s〉は不可能で、それを (Mirror に従って) 表す形式 \*/し - V - s / はなかった。当時に可能だったのは、意味 〈〈〈する〉s〉V2〉 だけで、それを表す形式は / する - s - V2 / だった (図 (2) の破線)。現代語の表現で例示すると、「苦労させ合う仲」「お前、教育され直して来い!」のように。(なお、ⅢとⅣ類の V2 については、現在でも、/ し - s - V2 / ((10) のβ列) だけがあり、/ し - V2 - s / はない。)
- (オ) ある時、Ⅱ類の V2 に新用法として意味 〈〈V1〉V2〉ヴォイス辞〉が出現した。それを表現するために二つの方法が採られた。まず、新たな意味を形態素順に反映させる新たな形 / し - V2 - させ /、/ し - V2 - られ / を作ったものが、語順 A。一方、意味的作用域を語順に反映しないけれども、元来から存在しており近似の意味を表していた形 / させ - V2 /、/ られ - V2 / を流用したものが、語順 B である。両語順それぞれの成立契機は、共時的な体系においては (4.2 で述べた) 存在の動機付けの二つに呼応する。
- (カ) 一方、V1 が五段・一段動詞の場合に関しては、元来から、Ⅰ類の複合動詞からであれば使役や受身が可能であった。(例、「走り回らせる」「押し倒される」)。(この推測は、この類の複合動詞が“語彙的”であること、つまり統語的に一語相当の大きさであることに基づいている。) したがって、形式として /V1 (五段・一段) - V2 - させ / と /V1 (五段・一段) - V2 - られ / というスキーマや、より個別的な / 走り - V2 - させ /、/ 押し - V2 - され / のようなスキーマが存在した。これらの形式は、新規の意味の意味的作用域を反映させることができる。これを利用したのが語順 A だ。語順 B という妥協は採用する必要がなかった。

## 6. 変化の輪郭

第 6 節では、変化過程の全体の輪郭を描く。6.1 で、変化の将来について予測する。6.2 で、近過去 (5.3) と将来 (6.1) についての考察結果を繋ぎ合わせて全行程を描く。

## 6.1 将来についての予測

語順 A と B の勢力は、アンケート調査対象の期間を超える幅のタイムスパンにおいてはどのように推移するか —これまでどう動いてきたか、今後どう動くいていくのか—。このうち、過去の方向に関しては、5.3 で扱った。第 6.1 節では、未来の方向について論ずる。本稿の予想は、(キ) のようだ。

(キ) もし今後 A, B 両語順の均衡が崩れるという変化が起こるなら、それは語順 A 伸張の方向へである。

ただし、変化が起こるか起こらないか、また、起こるとすればいつかについては、一概に予測困難である。殊に (キ) の変化に関しては、全く予測不可能である。

(キ) の予測は、次のような、歴史的変化の展開の順序に関する一般則によったものだ。一続きの文法的变化が文法の各側面で顕在化するのには、時間的な“ずれ”がある。その先後関係は、概略、次の (i) や (ii) の言い方で捉えられる (記号：先>後)。変化が一側面に及んだ後、他の一側面に及ぶまでの期間においては、文法レベル間 (例えば、意味と形式) の対応に“ねじれ”が見られることになる。

- (i) 意味的側面 > 形式側面
- (ii) 文法的操作 > 形態 (Anderson 1977, Cole 1980 など)

本稿は 5.3 で、新用法の成立が近過去に起こったと推測した。この出来事は、(i) の観点から言えば新しい意味の出現であり、また、(ii) の観点から言えば (使役化と受動化という) 文法的操作の適用領域の拡張である。将来は、もし (現状維持でなく) 変化が進展していくとすれば、意味と形式のねじれを解消すべく、語順 A が勢力を伸ばし語順 B が衰退していく。つまり、第 4 節で言う Mirror の規則が Template の規則に取って代わっていく。

本稿の予想する通時的変化 (キ) と似た事例は、バンツー諸語 (Bantu; アフリカ) において再構されている。「させ」に相当する使役 (causative) 接辞が関わるものだ。Hyman (2003: 249) によれば、概略、次のようである。バンツー諸語では動詞に複数の接尾辞が付く。原バンツー語 (Proto-Bantu) においては、次のような Template の規則によって、動詞接尾辞の配列が決定されていた。(V は動詞。\*ic などは再建形。)

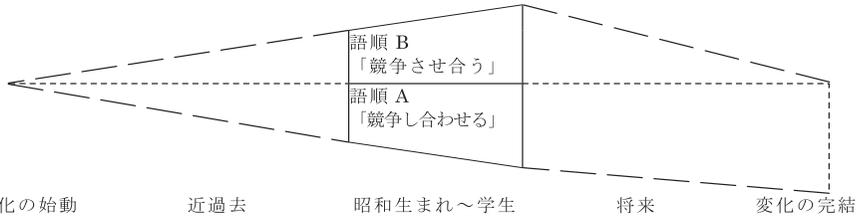
V - Causative - Applicative - Reciprocal - Passive  
           \*ic                  \*id                  \*-an                  \*-u

この状況を出発点として、現代 Bantu 諸語への過程において、Mirror の規則によって形態素順が決定されるようになってきた。例えば、意味 <<<動詞の>> applicative の> causative> を表す形式は、保守的には / V - Causative - Applicative / であり、革新的には / V - Applicative - Causative / である。

6.2 変化過程の全体的輪郭

近過去 (5.3) と将来 (6.1) についての考察の結論を繋ぎ合わせると、変化過程全体の輪郭は図 (21) のようになる。

(21)



	変化の始動	近過去	昭和生まれ～学生	将来	変化の完結
概況	(i) 新用法の出現	(iii) 新用法の定着過程、A,B 両語順が均衡しながら漸増		(iv) 語順 A が伸張、語順 B が衰退	(v) A だけ
¥の値		ほぼ一定 (V2「合う」の場合、 $\approx +0.5$ )		減少	-1
&の値	0	漸増 (V2「合う」の場合、0.0→2.5)		緩やかな減少	2

- (i) 元来は、(4) のⅡ類の複合動詞がヴォイス辞の作用域内に入る用法はなかった。例えば、意味 \*〈〈〈V1〉 合う〉させ〉、\*〈〈〈V2〉 忘れ〉られ〉は表出できなかった。
- (ii) 過去のある時、これら複合動詞がヴォイス辞の作用域に入る用法を獲得した。それを表現するために、二つの方法が採られた。新規の意味を形態素順に反映させて新規の形 ( / し - V2 - させ / , / し - V2 - られ / ) を作ったのが語順 A。元来から存在しており類義を表していた形を流用したのが語順 B。(ア)、(エ～カ)
- (iii) その後、現在に至るまで、新用法の意味は確立度を強めてきた。そのさい、語順 A と語順 B の勢力関係は、均衡してきた。(イ、ウ)
- (iv) 将来は、語順 A が勢力を伸ばし、語順 B が衰退していく。(キ)
- (v) B 語順がなくなり、意味と形式間のねじれは消滅する。

意味と形式のねじれ (語順 B) を解消する手立てとして、形式の変化 (キ) の他に、V2の意味変化が予期される。上記の (キ) とともに、下記の (コ) が起こるといふものだ。

- (コ) 将来、例文 (1) の V2 (あるいは、そのうちいくつかの V2、例えば、「直す」) が、control verb (表 (5) のⅡ類) に加えて、raising verb (Ⅲ類) としての用法も持つようになる。V2 = 「直す」の受身で例示すると、次のようだ。

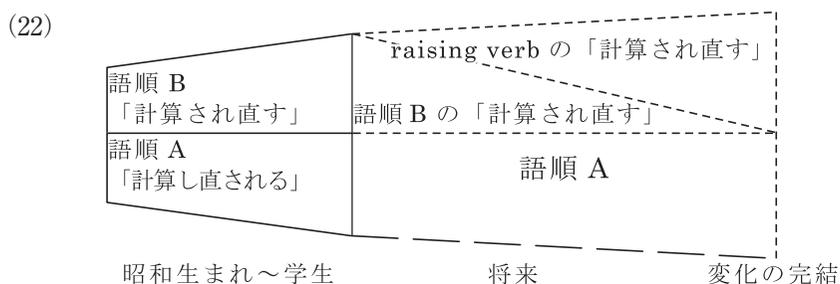
	現在ある用法	意味変化後の新用法
「直す」の意味類型	control verb	raising verb
「直す」の意味内容	〈主語が再び／新たに～する〉	〈再び／新たに～という出来事が生じる〉
/教育され直す/の意味	〈〈〈〈V1〉現解釈の直す〉られ〉	〈〈〈V1〉られ〉新解釈の直す〉

通言語的には、control verb から raising verb へという経路の用法拡張は、よくある種類である (Traugott and Dasher 2002 : 84, 98, 188)。例えば、補助動詞「おく」は、日本語

標準語では control verb である（したがって、意志動詞を要求する）が、この用法に加え、現在の西日本方言では raising verb のとしての用法（非意志動詞も可能）が確立しつつある（山部 2001, 2010）。

例文 (1) の V2 は、control verb である。このことは、V1 が意志性ないしそれに比せうる意味特徴を持つ述語に限られる、という制限に現れる。（例、「風呂に入って温まり直す」に対し、「\*部屋が温まり直す」。例外は、「(景気が) 持ち直す」のような語彙化した表現。）(コ) の意味変化の後、V2 は V1 として非意志的な述語も取れるようになり、例えば、「部屋が温まり直す」や「温められ直す」(/ 五段・一段動詞の受身-直す/) のような表現が可能になる。語順 B の形式（例、/ 計算され直す/）については、この形式は (コ) の変化後も存在し続けるが、表される意味は「直す」が V1 だけでなく受身までを意味的作用域に含むものになる。（語順 A, B のいずれでもなくなる; 2.2 の末尾を参照。）この結果、意味と形式の間がねじれは解消する。

もし (コ) の変化が将来「直す」について起これば、「計算され直す」は図 (22) のような経過をたどる。



## 7. まとめ

本稿では、意味〈control verb から構成される複合動詞からの使役と受身〉を表す二つの語順について、現在における変異（ゆれ）を取り上げた。世代差に関する事実観察を、通時的変化についての類型論的知見で補うことにより、変化過程の全貌を素描した。近過去における始動とその後の推移を再構し、近未来における変化の可能性を述べた。

この変化の始動は、受身の「られる」や使役の「させる」の用法拡張と、「～合う」「～忘れる」など一群の複合動詞の文法化との交差だ。これに対処するさいに、文法レベル間の“ねじれ”が生じた。今後、ねじれの解消へ向かう過程が予期される。現在は、一連の経過の途中だ。

調査と考察から得られた結果の一方、いくつかの定番の論点が触れられないまま残され、また、いくつかの新たな課題が明らかになった。本稿の議論においては、観察できた世代差は必ずしも明確ではなく、また、援用した知見の多くは形態素順に特化して提示されたものでない。また、論考範囲を限定した。例えば、絶対年代について触れることを避けたし、Ⅱ類の V2 の個々の間の相違（例えば、グラフ (4) と (13) の場合の間に見られる）や使役と受身の間の相違についても十分に扱うことができなかった。現在進行中の変化について、その実態像をより鮮明によりするためには、より詳細でより広規模な実態調査と、

よりの確な理論的知見が要求される。当該の変化を、それを取り囲む期間やそれを取り巻く文法領域の中に位置付けることも興味をそそる課題である。

## 8. (付録) インターネット用例調査の手順

第8節では、本文の三つのグラフに示される資料を得るために行った調査の手順を述べる。三グラフ間で、また、グラフ(13)では二つの項目の間で、例文収集の手順を違えた。そうした理由は、該当例をできるかぎり広範囲で浚うこと、検索エンジンの制約を回避すること、効率的に非該当の例を除外すること、など複数の実務的要請を満たすためである。

次の点は、三グラフの調査に共通である。使用した検索サイトは、グーグル。検索文字列は、「V1、V2、s、活用語尾」からなるフレーズ。例、「競争させ合った」「論じられ尽くす」。

### グラフ(4a)

グラフ(4a)は山部(2011a)の資料に基づく。手順の詳細は同論文に記載。以下は概要。実施時期。主に2010年夏、その後2011年5月まで補足。

検索文字列：V1：サ変動詞は「競争する」「反目する」など80。五段動詞は「競う」など15。一段動詞は「確かめる」など6。V2：「合う」は漢字表記とひらがな表記。活用形：語順Aは終止形と連用形。語順Bは終止形、連用形、「た」形、「て」形。

件数の数え方。実際の書き込み行為の件数を、次のように求めた。検出例の全てを個別に点検し、目当ての意味〈〈V1〉V2〉s〉に該当するもののみ全てを選び出し、同一の書き込み文章の重複検出をまとめて1として数えた。

### グラフ(4b)

実施時期。2011年10月。

検索文字列：V1：サ変動詞は、「議論する」「消費する」など108。五段動詞は、「使う」など30。一段動詞は、「論じる」など10。V2：「尽くす」は漢字表記とひらがな表記。V1には、受身文での主語が非情物になるものを選んだ。また、突出した数の重複検出(主に成人向けの商業広告)を含んでいたV1は避けた。活用形は「る」「て」「た」形。

件数の数え方。検出例のほとんどが非情物主語かそれに類似の文だったおかげで、非該当例やその疑いのある例はわずかだった。検出最終ページに表示される“似たページを除く”件数を数えた。したがって、報告件数は、非該当例の件数をわずかに含み、さらに、コピーページの存在によって実際の書き込み件数の3倍程度に膨らんでいる。

検出件数(“似たページを除く”)が350を超えたセルは、逆語順の対応セルともに、計算から除外した。例えば、「使い尽くされる」439件は、「使われ尽くす」22件とともに除外した。これは、グーグルの表示件数の上限が400件台のどこかにあるようで、それに近い表示件数は実態を反映しない恐れがあったためである。

### グラフ(13)

調査時期。2011年夏

件数の数え方。サ変動詞については、実際の書き込み行為の件数を、(4a)と同じ手

順（上述）で数えた。五段・一段動詞については、動詞を選ぶことで、非該当例の検出がほとんどなくし、突出した数の重複検出を避けた。検出最終ページに表示される“似たページを除く”件数を数えた。したがって、報告件数は非該当例の件数をわずかだが含み、さらに、コピーページによる3倍程度の件数膨張がある。

検索文字列：サ変動詞は「フォローする」「攻撃する」など251。五段動詞は「殴る」など46。一段動詞は「訴える」など12。「返す」は漢字表記とひらがな表記。活用形は「る」「て」「た」形。

## 引用文献

- Ackema, Peter, and Ad Neeleman (2005) Word-formation in optimality theory. Štekauer, Pavol, and Rochelle Lieber, eds., *Handbook of word-formation*, pp.285 – 313. Dordrecht: Springer.
- Aissen, Judith, and David Perlmutter (1976) Clause Reduction in Spanish. *Proceedings of the 2nd Annual Meeting of the BLS*, pp.1 – 30.
- \_\_\_\_\_, and \_\_\_\_\_ (1983) . Clause Reduction in Spanish. D. Perlmutter, ed., *Studies in Relational Grammar 1*, pp.360 – 403. Chicago : Chicago University Press.
- Anderson, Stephen R. (1977) . On mechanisms by which languages become ergative. C. Li, ed., *Mechanisms of Syntactic Change*, pp. 317 – 363. Austin: University of Texas Press.
- Baker, Mark (1985) The Mirror Principle and morphosyntactic explanation. *Linguistic Inquiry* 16, pp.373 – 415.
- Bobaljik, Jonathan David, and Susi Wurmbrand (2005) The domain of agreement. *Natural Language and Linguistic Theory* 23, pp.809 – 865.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax*. Dordrecht: Reidel.
- Chapman, Don (2008) Fixer-uppers and passers-by: Nominalization of verb-particle constructions. Susan M. Fitzmaurice, and Donka Minkova, eds., *Studies in the History of the English Language IV*, pp.256 – 299. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Cole, Peter, Wayne Harbert, Gabriella Hermon and S. N. Sridhar (1980) The acquisition of subjecthood. *Language* 56, pp.719 – 743.
- Hopper, P.J., and E.Traugott (2003) *Grammaticalization*, 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hyman, Larry M. (2003) Affix ordering in Bantu: a morphocentric approach. G. E. Booij, Jaap van Marle, eds., *Yearbook of Morphology 2002*, pp.245 – 281. Kluwer: New York.
- Narrog, Heiko (2010) The order of meaningful elements in the Japanese verbal complex. *Morphology* 20, pp.205 – 237.
- Traugott, Elizabeth C., and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in semantic change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 山部順治 (2001) 「補助動詞「おく」の意味」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語日本文学編』 25 (1), pp.53 – 78.

- \_\_\_\_\_ (2010)「現在進行中の文法変化—補助動詞「おる」から「おく」へ—」 上野善道 (監修) 『日本語研究の12章』 明治書院、pp.98 - 113.
- \_\_\_\_\_ (2011a)「複合動詞とヴォイス辞がからむ語順変異—「監督が選手たちを {競争し合わせる～競争させ合う}。」—」 『日本言語学会第142回大会予稿集』、pp.164 - 169.
- \_\_\_\_\_ (2011b)「日本語で現在進行中の語順変化」日本歴史言語学会第1回大会(大阪大学)でのハンドアウト